

ハーとん じんけん作品賞 啓発作品集

2025(令和7)年度



宝塚市人権・同和教育協議会



宝同協シンボルマーク

はじめに

宝塚市人権・同和教育協議会は、人権問題のあらゆる差別解消をめざす啓発活動の一環として、市内の小学校・中学校・支援学校・高等学校に在籍する児童生徒をはじめ、広く市民のみなさんを対象に、人権啓発作品「ハーとんじんけん作品賞」の名称で、人権啓発作文や詩・標語・ポスター・写真を募集してきました。

今年度も、各学校におけるご指導の成果がうかがえる作品が数多く寄せられるとともに、民生児童委員や保護司のみなさまからは数多くの標語を「応募いただきました」。

作文(詩)・標語・ポスター・写真を通して、さまざまな人権問題を鋭い人権感覚で捉えている作品や、心温まる作品などが数多くあり、純粋な感覚でものごとを捉え、真剣に考え行動していることとする意欲がうかがわれる作品に感銘を受けました。また、あいさつや身近な人への思い、いじめ、障がい者や外国人への差別問題、さらには平和の問題、LGBTQ+など多様性尊重の意識など、今日的な人権問題について考えを深めた作品も多く見られ、子どもたちを含む市民のみなさんの人権問題への関心の高さを感じました。

今年度は写真の部で、十七点と例年になく多くの応募をいただきました。これは子どもたちにもスマホで簡単に撮影できる時代の訪れかと思われれます。今後一層、人権の観点から何を視点にしていくかを学ぶ機会となればと思います。

寄せられました作品は、いずれも素晴らしい作品ですが、紙面の関係から最優秀・優秀・佳作に入賞された作品をそれぞれ集録いたしました。

これらの作品は、FM宝塚「人権の宝箱」での放送や宝同協ホームページで掲載させていただきます。学校や職場、地域社会での人権・同和学習や小学校区ごとに開催される市民集会での紹介など、啓発資料として広くご活用いただき、市民の人権の輪を広げるとともに、人権意識の高まりに役立つことを願っております。

また、学校におきましても、人権学習の教材として大いに活用していただければ嬉しく思います。

終わりにりましたが、作品をお寄せいただいた多くの方々から感謝を申し上げますとともに、学校の先生方、実行委員・選考委員のみなさま方には大変お世話になり、ありがとうございました。

二〇二六(令和八)年 三月

宝塚市人権・同和教育協議会

会長 和久有彦

ハーとんじんけん作品賞 入賞作品(作文(詩)の部)

○最優秀

みんなちがってみんないい……………小浜小学校
 『ひらがな(っ)つき』と識字学級……………宝塚市内小学校
 弟からのメッセージ……………安倉中学校

○優秀

私とおばあちゃん……………宝塚第一小学校
 わたしのみぢかなバリアフリー……………良元小学校
 私の当たり前、あなたの当たり前……………すみれが丘小学校
 「(っ)さ」って何?……………宝塚小学校
 差別と区別……………光が丘中学校
 私なりの普通……………南ひばりが丘中学校

○佳作

ニコニコは世界きょうつう……………すみれが丘小学校
 思いやりのボタン……………長尾小学校
 大切なあいさつ……………売布小学校
 人のやさしさ……………宝塚小学校
 ありのままの私……………仁川小学校
 ちがいをこえて話そう……………山手台小学校
 私が願う街……………宝塚中学校
 1つのプレスレット……………御殿山中学校
 日常から学ぶ公平と平等……………宝塚第一中学校

第四十四回全国中学生人権作文コンテスト入賞作品

○法務省人権擁護局長賞

障害のある人の生きがい……………市内中学校

三年

眞田

唯花

13

三年	二年	二年	二年	六年	六年	四年	三年	二年	三年	一年	一年	六年	六年	三年	三年	三年	五年	三年
岩見	大塚	茅野	安竹	竹内	中津留	藤川	林	永島	前田	鎌田	戸梶	荻野	工チヤ	松田	岩見	大塚	茅野	安竹
怜	奨	七海	陽貴	瑠絵	葵	千尋	華楓	美結	真衣香	祈穂	晴翔	心花	アーネスト	円花	岩見	大塚	茅野	安竹
7	8	8	9	9	9	10	11	12	3	3	4	4	5	6	7	8	8	9
岩見	大塚	茅野	安竹	竹内	中津留	藤川	林	永島	前田	鎌田	戸梶	荻野	工チヤ	松田	岩見	大塚	茅野	安竹
怜	奨	七海	陽貴	瑠絵	葵	千尋	華楓	美結	真衣香	祈穂	晴翔	心花	アーネスト	円花	岩見	大塚	茅野	安竹
7	8	8	9	9	9	10	11	12	3	3	4	4	5	6	7	8	8	9



ハートんじんけん作品賞 入賞作品(ポスターの部)

○最優秀

山手台小学校	三年	春田 渚帆	20
すみれが丘小学校	六年	内堀 仁香	20
安倉中学校	三年	佐野 心悠	20

○優秀

長尾台小学校	二年	仲村 社葉	20
末広小学校	二年	大井 津咲良	20
丸橋小学校	六年	安永 ゆい	20
長尾小学校	四年	渡邊 風香	21
高司中学校	二年	間野 悠万	21
長尾中学校	三年	平田 樹	21

○佳作

長尾台小学校	一年	坂本 蓮太郎	21
小浜小学校	一年	田端 茜	21
良元小学校	三年	辻 真守	21
逆瀬台小学校	六年	松元 葵	22
長尾南小学校	六年	福家 瑞基	22
宝塚小学校	五年	森本 陽紀	22
宝塚中学校	一年	安達 理乃	22
高司中学校	三年	北村 美音	22
長尾中学校	三年	小林 湊美	22

ハートんじんけん作品賞 入賞作品(写真の部)

○最優秀

雲雀丘学園小学校	三年	心山 紬	23
----------	----	------	----

○優秀

御殿山中学校	二年	篠崎 由奈	23
雲雀丘学園小学校	六年	後中 賜音	23

○佳作

西谷中学校	三年	塩見 咲月	23
宝梅中学校	三年	近藤 由菜	23
宝梅中学校	三年	坂田 佐和子	23

2025年度 ハートん じんけん作品賞

○実行委員会委員

- 伊藤 章 委員長 副会長(安倉中学校校長)
- 西口 信幸 学校教育部(末成小学校長)
- 平山 審 学校教育部(小浜小学校長)
- 渡辺 和恵 副会長(総務担当)
- 中川 絢子 社会教育部(自治会部会)
- 中野じゅん 社会教育部(PTA部会)
- 川勝 陽一 社会教育部(保護司会)
- 吉本 祐子 校区人権啓発部(長尾南小学校区)
- 藤川 明人 行政部(教育行政部会)

○ポスターの部・写真の部の選考に加わる教員

- 池内 純 宝塚市立光明小学校
- 西山 彩加 宝塚市立美座小学校
- 吉田 葵 宝塚市立安倉北小学校
- 小西 裕介 宝塚市立丸橋小学校

○小学校作文の第1次選考に加わる教員

- 徳田 富美子 宝塚市立高司中学校
- 原田 淳子 宝塚市立宝塚中学校
- (低学年)
- 上田 鶴美 宝塚市立西谷小学校
- 篠田 充世 宝塚市立宝塚小学校
- 小國 彬仁 宝塚市立長尾南小学校
- 角井 郁名 宝塚市立売布小学校
- 重本 由貴 宝塚市立西山小学校
- (高学年)
- 園田 浩之 宝塚市立長尾小学校
- 木山 達雄 宝塚市立安倉小学校
- 垣内 七海 宝塚市立末広小学校
- 芦田 萌 宝塚市立山手台小学校
- 横野あゆみ 宝塚市立たからづか支援学校

○中学校作文の第1次選考に加わる教員

- 伊藤 章 宝塚市立安倉中学校校長
- 首藤 大典 宝塚市立高司中学校教頭
- 加茂 千尋 宝塚市立宝塚第一中学校
- 芦田真樹子 宝塚市立長尾中学校
- 稲垣 久和 宝塚市立西谷中学校
- 吉田 昌代 宝塚市立宝塚中学校
- 後藤 章次 宝塚市立宝梅中学校
- 中村 有希 宝塚市立高司中学校
- 高濱 香澄 宝塚市立南ひばり力中学校
- 濱崎 桂伍 宝塚市立安倉中学校
- 中村 剛希 宝塚市立中山五月台中学校
- 市宮 咲子 宝塚市立御殿山中学校
- 岡田 真子 宝塚市立光が丘中学校
- 森本 由美 宝塚市立山手台中学校



ハーとんじんけん作品賞 入賞作品〈作文(詩)の部〉

◎ 最 優 秀

みんながってみんないい

宝塚市立小浜小学校 三年 垣内 裕太郎

ぼくは吃音です。

吃音とていつのは、話す時に言葉がつまったり、どもつたりすることです。百人に一人くらいで、あまり知られていません。だから、からかわれることもありません。からかわれるとかなしくなるし、よけいどもります。

二さいから吃音が出はじめて、パパとママが大学の先生に吃音のことを聞きに行ってくれたこともありました。ようち園のころは、言葉の教室に通っていました。

少しはよくなりましたが、かんぜんには、なおってません。

だから、もしどもつたりしたら、からかわずに待ってほしいです。もし、ぼくがいの人がどもつていたら同じようにからかわずに待ってほしいです。

うまへ話せない人がいた時は、「みんながってみんない」とい言葉を出してほしいです。

みのまわりでは吃音だけでなく、体が自由な人もいます。

それ以外の人が何もない人は、かいつのひとよばれま。でもぼくは、それ以外の風に分けるのは、おか

しいと思います。

なぜなら、からかわれたり、バカにされた時は、みんな同じようにきずつくからです。だから体が自由な人も、そうでない人も、「みんながってみんないい」と思います。

ぼくは家で音読のしゅく題をする時は、言葉がつまる所を何回も練習しています。

ぼくがいの体が自由な人も、見えない所がんばつてると思います。それ以外のことをそつぞつしてほしいと思います。

こつしてがんばつてゐるのに軽い気持ちでバカにされると悲しくなります。ふだんがんばつてゐる、すがたを見る、その人のお父さんやお母さんや、きょうだいも悲しくなるから、軽い気持ちでバカにするのはやめてほしいです。

バカにしたくなっても、「みんながってみんないい」とい言葉を出してほしいです。

『ひらがなごっき』と識字学級

宝塚市内小学校 五年 中川 聡香

図書館で『ひらがなごっき』という絵本を見つけた。小さい時にこの絵本の絵をかいている人の絵本をよく読んだなあとなつかしく思い、また、絵がほつこりしてかわいこのでペリペリとめくってみることにした。

『ひらがなごっき』は表紙にはおばあちゃんの絵が

かいてあるけど、小さな子どもが日記を書くお話かなと思つて読み始めた。でも最初の日記に「きょうはわたしのおたんじょうびです。66さいになりました。」とひらがなで書いてあってびっくりした。最初はばらばらと読んだ。どのページも気になるいところが書いてあるけど、意味がよく分からなかったの、何度も何度も読み直した。そして、「絵本にそえて」も読んだ。「絵本にそえて」には「識字学級」とい言葉が出てきた。わたしは、「あつ。」と思つた。私がよく行く公共施設の階段のおどりの場の手作りのカレンダーに書いてある字、「識字」。私はこの「識字」の意味が分からなくて母に「こつこつこつ意味？」と聞いてみたことがあつた。私の中の回路がつかつた。それから、また、何度も絵本と「絵本にそえて」を読んだ。内容がゆつくりと頭に入っていく、じんわりと心にもしみわたつていく感じがした。

私は六才になつたら小学校に行くのは当たり前で、字や算数を習うのは当然のことだと思つていた。宿題の漢字ドリルも計算ドリルもめんどうくさつた。「勉強なんかなかったらええのに。」と毎日思う。正直、「学校なんかなかったらいいのに。」と思つた日もあつた。

この本を読んで、読み書きや計算、学校に行く、私にとつては当たり前だが、当たり前ではないこと、私に分かつた。主人公のおばあちゃんには差別と貧困のために子どもに学ぶ機会をえられなかつた。読み書き計算ができない不便さ、くやしき、情けなさは私に今まで経験も想像もしたことがない感情だ。

識字学級で字を勉強したら、その字が逃げないよ、うに手に書いて、にぎりしめて家を持って帰つたり、病院で自分が書いた名前を読んでもらつたとき、書

んだり、駅で落書きを見てびっけりして、はらが立つて、なみだが出たおばあちゃん。「だじいな かわい いじいってひとの わるんち かいて」私は「字」を大切に思っておばあちゃんの感性に感動した。

おばあちゃんの日記は、少しずつ漢字がふえていく。「絵本にそえて」からも字を書きたいと思うおばあちゃんの意欲が伝わってきた。文字で文章を書きたいという気持ちもいたいほど伝わってきて胸が熱くなった。

私がよく行く公共施設にも「識字学級」がある。識字学級とは、「差別にふって字を学ぶ機会をうばわれたり、様々な事情で文字が書けない人たちのための教室」だそうだ。「うばう」という言葉の意味。それは、「力づくで取り上げること」「学ぶ機会をうばわれる」ということであり、とても悲しいことだ。

遠い遠い国の人や昔の人ではなく、私がよく行く公共施設に、今もこの「うばわれた機会」をとりもどそうとがんばっている人がいることにじーんときた。おどろ場にはってある作品はきつとうばわれた文字を取りもどした成果の一部だろう。そして、世界には、今戦争などによって「学ぶ機会」をうばわれている子どもがたへんいる。

漢字ドリルも計算ドリルもめんごくなく。夏休みには、作文の宿題もあって本当に嫌になる。でも、私はこの絵本に出会って少し考え直すようになった。私は毎日学校に行けて勉強をすることができるとして、習った字で作文も書いて、自分の考えたことを人に伝えることができる。これから、私は、子どもや人の「学ぶ機会」をつばわらない世界にするためにがんばりたいのかを考えていきたいと思う。

弟からのメッセージ

埼玉県立安倉中学校 三年 野原^{のほ}礼慈^{れいじ}

弟は背が低い。たぶん学年で一番低いと思う。二歳の時病気になって今も治療中の薬の副作用だ。病気で食べ物の制限や運動の制限がたくさんあるし、毎日たくさん薬を飲んでる。小学校六年の時には、副作用で背骨を骨折して、寝たきりになり、一学期中は授業が受けられなかった。修学旅行にも行けなかった。二学期の運動会もほとんど参加できず、ソーラン節の演技後に保護者の拍手の中、トラックを歩いて進むセレモニーも、テントの下で友だちの行進を見ていた。自分の時は、拍手の中歩くのが恥ずかしい気持ちだったけれど、一人で待つ気持ちを想像したら切なかった。

重たい荷物を背負うことが出来なくなり、中学校には歩行器を使って通学している。中学校は三つの小学校の集合体となり、最初から目立ってしまう弟は、入学早々にトラブルに巻き込まれた。からかいの対象となり、歩行器にいたずらされた。でもそれは家族の中ではある意味想定内のことだった。想定外だったのは、いつでももうさういふらういふく喋る弟が、なかなかそのことを相談できないことを家族みんなが改めて感じた出来事だった。

それでも弟は、けっこう楽しそうに登校し吹奏楽部の活動に参加している。歩行器を押すため雨の日は傘をさせずレインコートを着ているが、傘を傾けて入れてくれる友だちがいて「守ったー!」と言ってくれる同級生もいるらしい。部活では重たいものを

運んでくれる先輩がいると話していた。弟の良いところは、自分の状況を卑下しないこと、親切を受け入れる強さだ。

弟の病気は誰のせいでもない。同じように病気で障害で働けない人や、高齢で身の回りのことが出来なくなるのも誰の責任でもない。今の世の中は、タイパやコスパで物事を考えたり生産性で評価されたりすることが多いが、私はそれには反対だ。効率のいいことだけが重要ではないし、何か特別なことが出来たり、社会に評価される仕事だけが素晴らしいとは思わない。

弟が病気になって以降、父の家事・育児協力は圧倒的に増えたと母が言っていた。私たち兄弟も小さい時から弟の入院や苦しい治療の姿を見て、なんでも制限なく食べられること、自由にスポーツができること、外出に制限がないことは、当たり前のことではないし、しかも自分の努力によるものではないことを知っている。弟の存在が家族の絆を強くし、当たり前は当たり前でないことを教えてくれている。人は努力も必要だけど、持っている能力や可能性、環境は選べないことも多い。直接の生産性とは関係ないけれど、弟が生きる毎日が、私たち家族や周囲の人に伝えるメッセージは、全く無駄なのか？私はそのうは思わない。

日本と世界のどこでも、どんな人同士も生産性とか能力とか、わかりやすいものだけを評価して繋がるのではなく、お互いをリスペクトして共生していく社会になることを願っている。私が世の中を変えていく力はない、だが、なにも言えない人が苦しくて声を上げられない人もいるかもしれないと、創造す

ることを忘れずにいたい。弟の友だちのように自然と傘を傾けられる大人になりたい。

◎ 優 秀

「私とおばあちゃん」

宝塚市立宝塚第一小学校 三年 前田 真衣香

私のおばあちゃんが、大そうじをしている時、頭にけがをしてしまい、12月から6月まで入院していました。おばあちゃんは、病院で、頭の中の手術を3回しました。

今のおばあちゃんは、スポンを反対にはいてしまったり、おそうじができなくなったり、一人で外を歩けなくなりました。「ごはんを食べ終わった後やテレビを見てると中に、すべにねてしまっています。今までのおばあちゃんは、お仕事をしっかりしていて、おそうじもいねにできていました。おばあちゃんがソファの上でね転んでるのを見ることがありませんでした。「おばあちゃんは、高次きのうしゅうがいとらうしゅうがいなのだよ。」と母から聞きました。この言葉は、はじめてしりました。

夏休みに、私はおばあちゃんの家に行きました。私は、おばあちゃんの点つなぎや算数の丸つけをしました。点つなぎと算数はおばあちゃんのリハビリです。そして、おばあちゃんは、毎日歩く練習をしています。私もついでに歩かずに歩きました。おばあちゃんがおそうじをしていて、おそうじができていな

場所は、私もついでにおそうじをしました。おばあちゃんは、できないことがふえました。でも、私にがんばって昼食を作ってくれます。私が自分のひざのうらをかいていたら、すべにほれいさいを持ってきてくれます。おばあちゃんはしゅうがいをもっているけれど、がんばって私に色々してくれることがうれしです。大好きなおばあちゃんが頭をけがした時、かなしくてたぐさんなきました。でも今、ついでにお話ができることがうれしです。

これからも、けがをする前と同じように、おばあちゃんと遊びたいです。公園に行ったり、オセロをしたいです。できるなら、卓球もしたいです。卓球は、おばあちゃんとする遊びの中で一番好きな遊びです。おばあちゃんも、「また卓球したいね。」と言ってくれます。そのため、おばあちゃんにはリハビリをがんばっています。私は、これからもおばあちゃんのリハビリのお手伝いをしていきます。

わたしのみぢかなバリアフリー

宝塚市立良元小学校 三年 鎌田 祈穂

わたしは、はんきゅう電車にのることが多いです。はんきゅう電車には、赤むらさき色のぎせきがあります。このせきは、ゆうせんざせきといって、小さいごもをつわっている人、お年よりの人、体がふ自由な人、体の中にしゅうがいがある人、おなかに赤ちゃんがいる人など、ぎせきをひつよつとする人が、ゆうせんにすわれるそうです。

わたしが、お母さんのおなかの中にいた時に、なんどもせきをゆずってもらってとてもうれしかった。お母さんから聞いたことがあります。わたしも小学生になるまでは、すわらせてもらいませんでした。でも、さいきん電車にのっていると、ゆうせんざせきに、大きなもつをおいていたり、わかにおねえさんやお兄さんが、イヤホンで音楽を聞いていたり、ドラマを見ていたりすることが、とても多いなあと思います。

わたしは、そういつの時、「には、ゆうせんざせきなのにな・・・。」とはらが立ちます。だから、せめてあとのつてきたお年よりや、おなかの大きな女の人などには、せきをゆずってあげてほしいなあと思います。わたしは、こまっている人がいたら、自分から声をかけて、せきをゆずってあげられる人になりたいです。そして、みんながにこにこえ顔ですこせるよつになれればうれしです。

そのほかに車イスの人が電車にのってきたときに、はんきゅう電車のえきいさんさんがスロープを使っ

て、車イスでのりおりができるようにしてあげていました。車イスの人は笑顔で「ありがとっごさいます。」と言っていました。えきいんさんにも「ごさいます。」とまわっている人をたすけにきてくれるえきいんさんのことが、かっこいいなと思いました。

ゆうせんざせきや、えきいんさんのスロープは、バリアフリーという体の自由な人やお年よりがみんなと一緒には生活していい中ずこまることのないようにする方ほつや、へんつの一つです。わたしが知っているバリアフリーは、まだまだ知らない物が多いと思うけれど、これからいろいろなしゅるいのバリアフリーを見つけていきたいです。そして、見えない所で困っている人がいないような、世界になったらみんながなかよ〜、平和にへらせるのではないかなと思っています。

私の当たり前 あなたの当たり前

宝塚市立すみれが丘小学校 六年 戸梶 晴翔

「普通」ってなんだっつ。

私は誕生した時は男の子として生まれました。好きな物はウルトラマンや仮面ライダーのような戦隊ものなど男の子らしい遊びが好きでした。服装も当然男の子っぽい服を着ていました。しかし小さい頃は意識してなかった性別ということに小学校に入学してから少しずつ違和感を感じはじめました。2年生の3学期の終わりに私は髪を伸ばしたい、女の子

の服を着てみたいと感じました。そのことを相談しようか隠すか迷いましたが、まずはお母さんに相談しようと思いました。ただ私はその考えと共に「どうも思いました。これって「普通」じゃないと。お母さんは何でも私の味方になってくれるのできつと大丈夫だと思っていました。それでも「普通」じゃない私に味方してくれるか心配でした。もし否定された時になるべく傷つかないようにさりげなく明るく伝えたのを今でもハッキリ覚えてます。

そんな私の心配をよそに、お母さんはあっさりとして理解してくれた事に少し驚きましたが、心の底からホッしました。お母さんはそれから学校にも話してくれて、友だちもそのことには触れてきませんでした。でも、「女子トイレに行け」といわれたり、「男のくせになんで髪の毛伸ばしてへんつてるん？」と言われて胸がギョツと苦しくなりました。その時私は「普通」ってなんだろつと考えました。人はそれぞれ肌の色が違ったり、背が高かったり、細かったりといろいろな種類の人が生きています。計算が得意な人、歌を歌うのがうまい人、みんな得意不得意があるのと同じように私は女の子として生きていきたい。他の人に比べて違つかもしれない。他の人から見たら少数派かもしれないけれど、私の中では「普通」のことで、私もみんなと同じように毎日を生きています。

「普通」とはなんでしようか。私はこの「普通」や「常識」「当たり前」という見えない鎖のような考えは、一歩間違つと差別や偏見の始まりになってしまうのではないかと思えます。私にとって「普通」とは誰かと比べて決められるものではありません。

人の数だけ「普通」があるとあります。もし誰かが同じように悩んでいるなら「あなたの普通もとっても大事なんだよ」と伝えたいです。

私は来年、中学生になります。制服を選べる事で自分らしくいられる選択ができるのがとても嬉しいです。スカートをはいている私に新しい友だちはびっくりするかもしれません。その時は、こんな選択肢もあるんだねと思ってもらえるように私は自分の心に正直に生き、ありのままの私の「普通」が周りの人にとって「いろんな普通があるんだ」とすこしずつ伝わるきっかけになればいいなと思います。

「らっつわ」って何っ?

宝塚市立宝塚小学校 六年 荻野 心花

昔、トランスジェンダーの友だちがいた。今はもう引越してしまい、連絡もとっていないが、その子のごことを今でもずっと忘れられない。

その子は体は女だが、心は男だった。私もまだ幼かったためトランスジェンダーという言葉も聞いたことがあつた程度で、その子について深く考えたこともなかった。今となつてはもっとよりよつてあげるべきだったのか、逆にその時の行動が正しいのかは分からない。ただその経験が、LGB TQの人たちへの理解がよつやく広まりつつある今、性別について考えるきっかけになつたことは間違いない。

とはありません。寿司屋に行くとお店の方が、気を遣ってくださり「イングリッシュメニュー」などわざわざ尋ねてくださったり、日本生まれ日本育ちにもかかわらず「お箸が上手に使えますね」などとお褒めいただいたりすることがしばしばあります。

少し話が脱線してしまいましたが、ぼくの二重価格に関する意見ですが、これは差別でもなんでもなく観光業を地元で負担をかけずに維持していくために必要な区別ではないかと思えます。まず観光訪日外国人に課されている料金が外国人を対象にしているわけではなく、日本に在住していない外国人すなわち日本で税金を納めていない外国人に課されているわけで、我が家のように日本に定住し税金を納めている場合は二重価格を免れているため外国人差別には当てはまらないのではないかと思います。

以前、家族でタイを訪れた際にも寺院で在住者料金と外国人料金が、もちろん我が家は、外国人料金を支払って拝観しましたが、そこに差別が存在するような印象は受けませんでした。海外から来たぼくたちが少し多く支払いタイの人々の信仰の場を見させていただき、それによって寺院が維持できるのであれば大いに結構ではないかと思えました。日々の生活やニュースなどで明らかに理不尽な差別が横行していることも事実です。見るに堪えないニュースもたくさんあります。SNSなどでも、いろいろな差別的投稿が日々溢れています。けれども、あたかもそれが正義であるかのように独りよがりて事実に基づかない投稿も数えきれないほど存在します。ビッグデータが巧みに活用されるため、自分の主義主張に偏った投稿ばかりが目につくようになり、情報量

が多いのに情報の多種多様性が自分では気が付かないうちに失われてしまっており、自分自身の考えが偏り、凝りかたまつたものになってしまいやすい世の中をぼくたちは生きているということに常に意識しながら情報を取捨選択していかなくてはならないと思います。

最近、日本人ファーストを掲げて多くの人々の支持を得て議席を増やした政党がありました。ぼくは、なんともいえない違和感と薄い恐怖心に似たようなものを感じました。日本人ファーストという日本人には響きのよい言葉の裏側に外国人を排除したいという本音が、隠れているように感じています。日本だけではなく、世界中で自国ファーストや極右政党が出てきている世の中をナチスが台頭してきて人々が、それを熱狂的に支持し始めたころと類似しているようにも感じてしまうのです。もしかすると、人間という生き物は歴史から何一つも学習できない生き物なのかもしれないと思ひ、悲しいような情けないような気持ちになってしまいます。これから人口が、確実に減少していく日本で外国人を排除するということは、決して現実的ではありません。これからの日本に必要なことは、日本人と外国人が互いに気持ちよく共存していくことを可能とするルール作りではないかと思ひます。差別はもちろんいけません。差別と区別を勘違いしてはいけない。常に多角的な視点で物事を自分の良心にしたがって考える訓練をぼくたちはしていきたい、外国人を差別せず、日本人と区別して共存していかねばならないと強く感じています。

私なりの普通

宝塚市立南ひばりが丘中学校 一年 松田 円花

私は生まれつき人より少し耳が悪く、いわゆる難聴です。難聴とは、通常の人と比べて聴く力に問題などがあり、普通の人より耳が聴こえにくい人の事です。私はその中で中度、補聴器と呼ばれる聴力を補助してくれる機械を付ければ日常で問題はない程です。

私は、記憶がうっすら残るくらい幼い時、「こば」と聴覚特別支援学校」という聴覚障害を持つ子が通う学校に通っていました。そこでは今となっては使えない手話も使っていた時があったようです。何かゲームをしたり、もの作りをしたり、そういった具合で、こばとでは楽しい思い出がいっぱいでした。

幼稚園に入園すると、興味津々で難聴の事や手話の事を聞いてきました。自分が誰かに何かを教える、という事が幼い私は嬉しくて、満更でもなく皆に教えていました。それがきっかけで友だちができた、という事もありました。ところがある日、同級生の男の子に補聴器を勝手に触られたり、取られたりしました。難聴であるのをからかわれ、とても恥ずかしい思いをしたのを覚えています。その時は友だちに「ひびくー」とその子たちを怒ってもらい、結局自分で反論できないままその場は収まりました。

小学校に上がると、少し大人になった気分で、皆にきちんと話して自分を知ってもらおうと思ひ、クラスメイトや友だちなどに優先して話しました。小学校に上がると、勝手に補聴器を触ったりせず、触っ

と元気に言ってくれます。そしてわたしは、自分のせきに行へままでにすれちがった友だちに

「おはよう。」とあいさつをします。そうしたら、自分の気持ちがスッキリします。帰る時には、

「バイバイ。また明日遊ぼうね。」

と言ってくれます。だから、また明日もがんばって学校へ行こうという気持ちになります。

このように、わたしのまわりには気持ちのよいあいさつをしてくれる人がたくさんいます。でもあいさつをしてくれない人もいます。そういう人に会うと、もったいないなと思います。

小さな声より大きな声、暗い声より明るい声であいさつする方が相手にとって心地のよいものになると思います。そのことを世界中の人に知ってもらいために、まずわたしが明るい大きな声であいさつしてこうと思えます。この作文を書いたことで、あいさつをするのがより大切だと感じました。

人のやき声

宝塚市立宝塚小学校 四年 安竹 陽貴

ぼくは話すのが苦手です。でも、そんなぼくにも、とてもいい友だちがいます。話せなくても、いつもぼくへの気持ちを読みとってくれます。

その友だちとは三年生の時に会いました。友だちが「はるるるる」を作ってくれました。「はるるるる」とぼくはおすし屋さんのことのことです。ぼくが

店長になって、おすしをお客さんに出します。その友だちは、おすしの絵をかいてくれたり、せんでんしてくれたり、おすしの本を貸してくれたりして、とても参考になったり助かりました。毎日、休み時間に開店して、クラスの人たちが来てくれました。ぼくのささやき声を聞いて、みんな、ちゃんと注文してくれました。ぼくに「はるるるる」は、とても大切なものになりました。

また、他の友だちは消しゴムバトルをして遊んでくれました。

消しゴムバトルとは、自分の消しゴムを指ではじいて、相手の消しゴムをつくえから落とすゲームです。みんながぼくにやさしくしてくれて、休み時間があつという間でした。たまに「はるるるる」でライバル店を開店した人がいて、ケンカしたこともありました。さすがにぼくもおおっして、声を出してしまつたことがあります。でも、すくになか直りできませんでした。

一番なかのいい友だちは、ぼくが頭がいたい時、ぼくのささやき声に気づいてくれて、ほけん室へ連れて行ってくれました。はんで決める時も、ぼくの意見を聞いてくれました。その友だちのやさしさに、いつも助けられました。その友だちは、こまっしている人を見のがさないので、ぼくも友だちがけがをした時に、ほけん室につきそいました。ぼくも友だちと同じように助けたいと思ったからです。

そして、先生もぼくの事もとても気にかけてくれます。授業のとき、話せなくても参加できるようにしてくれたり、苦手な作文をじっくりと考えてくれたりしました。先生のおかげで授業を楽しくすごせま

した。友だちも、先生も、みんながぼくにやさしくしてくれます。ぼくは学校がとても楽しいです。

ぼくは話せない事で、自分の意見を言ったり、思ったことを伝えたりするのは、とても苦手です。友だちとうまく話せないけれど、ささやき声で色々なことを伝えられるようになってきました。それはどうしてかという点、大好きな友だちと先生たちが、ぼくにとてもやさしくしてくれるからです。だから、ぼくも友だちにやさしくして、こまっしている人がいたら助けてあげられる人になろうと思います。そしていつか、友だちとたくさん話せるようになりたいです。

ありのままの私

宝塚市立仁川小学校 六年 竹内 瑠絵

導かれるように『ぼくの色、見つけた！』という本を手にとった。「読んでー」と本にさそわれているような気がした。読み進めると、主人公の気持ちが、私の気持ちと重なって変化していった。

この本の主人公の信ちゃん、生まれつき色覚障がいがあり、色の区別が付きにくい特性がある。小学校で信ちゃんが自分の似顔絵を描いた時、唇の色がちがうことをクラスの友だちに笑われることがあった。それなのに、先生は「信太郎くん、もう一度描いてくださいな」と言って、笑っていたみんなの事をしからなかった。だから信ちゃんは、自分には五色

にしか見えない虹を「みんなと同じように七色の虹が見えたほうがいいに決まっている」と思うようになった。そんなのおかしい。そう思ったのは、私にも信ちゃんのように悔しい思いをしたことがあったからだ。私は身長が低い。背の順に並ぶと最前列にしかなかったことがないくらい背が低い。でも、お母さんもお父さんも先生たちも小さいことを「いいやん、いいやん」と認めてくれていたので、あまり気にすることはなかった。でも、五年生のころ、とてもいやな思いをした。それは低学年の男の子に「ソソソ」と話をされた時のことだ。「あの人、五年生らしいで。ちつき。やっぱ〜」と言われたのが聞こえた。悔しくて、走って家に帰った。家についたとたん涙があふれて、こぼれ落ちた。「背が低いから何がやばいんだよー」と腹が立った。これまでに背が低いことを「可愛い」と言ってくれる人はいても、笑うような人はいなかった。

もし、信ちゃんが私の学校の友だちなら「唇をちがう色に塗ってもいいんだよ」と言ってくれる友だちはたくさんいるし、笑うような人を注意できる友だちもいる。でも、信ちゃんには悔しい思いをしたからこそ気づけたことがある。「生きてるって感じる」^楽「楽しんでたまるひびき」という素晴らしい感情を経験することができたのだ。そして、信ちゃんのおかげで、みんなも五色の虹があることを知れたのだと思う。だから、信ちゃんが自分の良さに気づき、自分だけの色を見つけて絵が描けた時は「やったぞ」と嬉しく思った。そして私は、色覚障がいでもできるのはおぼろげに、色覚障がいだからひびきとちつき考えに変わった。

私はこの本を読んで、私には私の事を知ってくれて、分かってくれる友だちや先生や家族がいることに気づかされた。そして、その人たちがとても大切なんだ。他の人と違って、違うからこそその良さがあることをもう一度、考えることができた。

これからは、違いについて知ってもらうために伝えたいと思う。そして聞く人は、話す人に目と耳と心むけて分かるうとする気持ちが大切だと思う。違ってからダメ、ではなく違うからこそ良い、そうやってみんなと関わりあって、一緒に成長していきたい。

ちがいを「こえて」話そう

宝塚市立山手台小学校 六年 中津留 葵

私が手話に興味を持ったきっかけは、大好きなアイドルグループの曲の中で手話が使われていたことです。メンバーの一人が動画で「この動きには意味があるんです」

と書いていたのを聞いて、どんな意味なのだろうと気になりました。私はその日から、手話についてもっと知りたいと思うようになりました。

本屋さんに行ってみただけれど、手話の本はすべて見つかりませんでした。「コミュニケーションの本はたくさん目立つ所に置いてあるのに、その中にはありません。やっと片すみにあった初心者用の手話の本を見つけて買いました。そこから、私は手話の勉強を始めました。

手話を学ぶうちに、耳が不自由な人たちはどんな生活をしているのか、どんなことに困っているのかが気になってきました。そこで聴覚に障がいのある方がやっているYouTubeチャンネルを見えることにしました。そこで、私は、日常生活の中で情報を得るのがむずかしかったり、まわりの人とコミュニケーションをとるのが大変だったりするのを知りました。今までは、手話を使っている人を見かけても、何だろうと不思議に思うだけで、自分には関係のない世界だと思っていました。でもそれはちがうと気がつきました。

私の母の職場にも、耳が不自由な方がいて、母は簡単な手話を使って会話をしているそうです。その話を聞いた時も、「お母さん、がんばっているんだな」と思うだけでした。自分は、そのことについて何も知ろうとしていなかったのです。

聞こえるか聞こえないかという、たったひとつのちがいで、思いが伝わらなかつたり、さみしい思いをしたりするのは、とても悲しいことだと思います。

今、私は指文字を練習したり、手話の本を見ながら、少しずつ言葉を覚えたりしています。初めは、まったくわかりませんでした。少しずつできることが増えてきて、うれしく感じています。

私は、これから、いろいろな人と出会っていきたく思います。言語が違う人、耳が不自由な人など、考え方や感じ方もちがうかもしれませんが、だからこそ、どんな人とも気持ちや伝え合える方法をたくさん持っていたいと思います。思いやりのある気持ちは、きっと伝えられると信じています。

どんな人も自分らしく生きることができるとやわ

い社会をつくるために、私も自分にできることを学び、行動につとめていきたいです。

私が願う街

宝塚市立宝塚中学校 二年 藤川 千尋

私には自慢の家族がたくさんいます。そのうちの一人が、私の祖母です。料理上手で、面白くて優しい祖母です。けれど、私は祖母と声を使って話をするのはほとんどありません。理由は、私の祖母は耳がきこえないからです。

祖母の耳がきこえないのは生まれつきではありません。私の母が学生の頃に耳がきこえにくくなったそうです。詳しくは知りませんが、祖母はもともと体が弱く、病気が悪化した影響で、耳がきこえにくくなったとのこと。私はその話を母から聞いたとき、母の立場、そして祖母の立場に立つて考えました。本当にその立場にならないと分からないのだろっけ、どちうにせよ、とても辛いものであることに間違いはないと思います。私は、小学校低学年のとき、よく祖母の家へ遊びに行っていました。祖母に、「うちの耳は少しかきこえるのよ」と言われ、兄と一緒に祖母の耳にこわでもかかと叩いて、祖母の名を呼んだのを覚えてます。そのとき、祖母が「今遠くで誰かが叫んでいるような声がきこえたわ。もしかして、今のがあなたたちの声なのかな」と笑顔で言われて、とても嬉しい気持ちになりました。

た。この頃私は世の中の人は耳がきこえない人や何らかの障害をもった人が一般的に知れ渡っていると思っていました。けれど、なかなか理解してくれない人がいるという現実を知りました。

小学校低学年のとき、祖母と二人で買い物に行きました。特に大変なことはなく、するすると買い物は終わり、私たちはレジに並びました。レジには若いお姉さんが立っていました。そこで「カードはありますか」というような質問をされました。普通は軽く手続きをする場面です。しかし、祖母には何もきこえていませんでした。私はききとれた「カード」という言葉を祖母に伝えました。その様子を見ていたレジのお姉さんが、さつとメモとペンを取り出し、筆談で質問をしてくれました。私は自分が何も手伝えなかった悔しさと、少しでも手伝おうと必死に指文字で単語を伝えたことを覚えています。そして私は買った物が終わった後に思いました。普段、祖母はどうやって相手に伝えているのだろう、と。毎回、相手の人が気が回る人とは限りません。そのとき祖母は一人で伝えているのだらうと考えると、私は少し暗い気持ちになりました。

別の日、祖母と私は散歩をしていました。少し歩道がせまいところだったので、縦に並んで歩いていました。すると、後ろから車が近づいていました。祖母が少し車道側にでているのが見えたので、「車きてるよ」と言いました。そして言ったあとに、車の音にも私の声にも気がつかないことを思い出しました。後ろから車は走ってきています。結果的に、車が去っていくれて最悪な事態は避けられました。車が去る際に「ほーっつとすんなー」というような声を上げて

きました。私は悔しくなりました。祖母は気がついたら絶対によけていたのにも思ったからです。そして私の注意不足だとも思いました。もっと誰もが使いやすい環境になればいいのに、と強く感じました。

私は障害を抱える人がもっと過しやすい世の中になればいいと思います。しかしそれが簡単なことではないことも分かります。だから、街の整備などよりも先に、人の心の変化が大切であると考えています。先ほどの出来事以外にも、たくさん不便を経験しました。その中で、最後まで祖母の障害を理解できなかったこともあります。まずはその理解ができる人を増やしたいなと思いました。例えば、障害をもつ人が学校などで身近に感じられるような授業をするということです。実際、私が小学生のとき、障害をもつ人が授業をしにきてくれました。その経験から、みんなが障害を身近にとらえ、その後の活動に活かされました。それ以外にも、幼い頃から絵本で障害について親子で考える機会をもったり、ポスターを活用して多くの人に障害やそのサポートの仕方を伝えたりして、社会に理解が根づいてほしいと思います。そして誰もとり残されることのない未来になるためにも、私は障害を抱える人が住みやすい街になることを願っています。

「ブレスレット」

宝塚市立御殿山中学校 二年 林 華楓

私は、先週の日曜日にブレスレットを買ってもらいました。そのブレスレットは、ビーズで作られており、アロマを二三滴たらして香りをたのしむものでした。そのブレスレットを選んでいるとき、店員さんがこのブレスレットについて説明してくれました。

このブレスレットは、日本製のグラスビーズを使って、ネパールの女性たちが一つ一つ手作りしている「フェアトレードのブレスレット」だと教えてもらいました。その話を聞いて、私はとても興味をもちました。

まず、どうしてネパールの女性がブレスレット作りをしているのか気になりました。調べてみると、このブレスレット作りは、ネパールの女性の自立を助けるための活動だということを知りました。

では、このブレスレットがどうやってネパールの女性の自立を助けているのか私なりに考えてみました。

一つ目は、公正なお金がもらえるところです。ぶつつの仕事より多くのお金がもらえるところで、女性たちは家族をやしなうことができ、貧しい生活から抜け出すことができます。

二つ目は、家で作ることができるところです。ネパールの女性の中には、子育てや家のことで外で働くのが難しい人がたくさんいます。でもブレスレット作りは家でもできるので自分のペースで働くことができます。

三つ目は、手作りの技術やデザインの知識を学べ

るところです。

これからの人生に役立つ力を身につけることができるので、いつか自分で仕事を始めることもできるかもしれません。

このようにブレスレット作りは、ただお金をもらえるだけでなく、女性たちが「自分で生きていくステップ」になっているのです。

ネパールのように、女性が不利な立場にいる国では、自分でお金をかせげることがとても大切です。学校に通えなかったり、仕事がほとんどなかったりする中で、家でできるフェアトレードの仕事は、女性たちにとっての「希望」なのだと思います。

さらに、どうしてネパールの女性たちはブレスレット作りをしているのか、もっと知りたくなり、調べてみました。

ネパールはヒマラヤ山脈にかこまれた美しい国ですが、あまり豊かではなく、自分の意見を社会で言うことも難しいそうです。特に子育てをしている女性は、外で働くのがとても大変なので、家でできるブレスレット作りを選ぶしかないことが多いのです。

私はこの事実を知って、おどろきました。日本では、男女にかかわらず学校に通うことができ、自分の将来について自由に考えることができます。でも、世界には「女の子だから」というだけで、学ぶことや働くことができない人たちがたくさんいます。

女性も男性と同じように、自分の人生を自由に選んで学び、働くことができるべきです。それが「人として当然の権利」だと私は思います。ネパールの女性たちは、厳しい現状の中でも自分の力で生きていくと頑張っています。そんな姿から私は少しで

も力になりたいと感じました。

私たちにできることは小さなことかもしれませんが、でも、例えばネパールの女性たちが作ったブレスレットを買ったり、世界のことに関心を持ち、目を向けたらいいことで、少しずつ力になれると思います。

世界中のすべての女性が自分の人生を自由に生きられるような社会になってほしいです。そのために、私ももっと学び、行動していきたいと思っています。

日常から学ぶ公平と平等

宝塚第一中学校 二年 永島 美結

私たちが生きていくうえで、とても大切なものの一つが「公平」と「平等」だと感じます。学校や家庭だけでなく、電車や駅などの公共の場でも、この二つは私たちの生活に深く関わっています。

けれども、「公平」と「平等」という言葉は、同じように見えて少し違います。平等とは、すべての人に同じ条件や機会を与えることです。たとえば、電車の座席は誰でも自由に座れるという点で「平等」と言えます。しかし「公平」とは、その人の状況や必要に応じて適切な対応をすることです。体の不自由な人や高齢の方が安心して電車を利用できるように優先席や点字ブロックが設けられているのは「公平」な仕組みだと思います。つまり、平等は「同じにする」と、「公平は」その人に合わせて支えるということです。

私は以前、電車の中で「公平」と「平等」の意味を深く考えさせられる出来事がありました。ある日、混んだ車内に白い杖を持った目の見えない方が乗ってきました。周りの人も気にしている様子でしたが、そのまま何もできずにいました。私も同じで、「席を譲った方がいいのだろうか」「でも、どんなふうに声をかければいいのか」と迷ってしまい、結局行動できませんでした。心の中では「何かお手伝いしたら」と思っていたのに、いついついのか分からず、時間が経ってしまいました。

その人は、しばらくして近くの人の助けで座席に案内され、安心したように腰を下ろしました。その姿を見て、私はホッとした反面、「自分も声をかけられただけなのに」と後悔しました。もし自分が同じ立場だったら、きっと誰かに声をかけてもらえただけで安心できるはずですよ。座席は誰でも平等に座れるものですが、その場で特に必要としている人に譲り、安心して使ってもらうことが「公平」だとそのときに気づきました。

また、駅でエレベーターを利用するときにも同じことを感じました。車いすの方やベビーカーを押している親子が並んでいたとき、周りの人たちは自然と階段やエスカレーターを選びました。みんなが必要な人を優先していました。私はそれを見て、「全員が同じ設備を使えることが平等」であると同時に、「その人が安心して使えるように配慮することが公平」なのだと実感しました。

もし平等だけを考えると、すべての人が同じ条件で行動しなければならぬことになり、目の見えない人や体の不自由な人は大きな不便を感じるでしょう。

逆に、公平だけを意識して一部の人には配慮してしまえば、不満や対立が生まれてしまうかもしれません。だからこそ、平等と公平の両方を意識し、その場に応じて考えることが大切なのだと思います。

私はこの経験を通して、日常生活の中で自分のできる行動をもっと考えようと思うようになりました。もしまた電車で目の見えない方を見かけたら、今度は「お手伝いしましょうか」と勇気を出して声をかけたいです。自分の一言や小さな行動が、相手に安心を届けることにつながるかもしれないからです。学校生活でも同じで、周りを見ながら自分にできることを率先してやったり、役割が偏らないように工夫したりすることが、公平さを実現することだと思います。

これから社会に出ていく中で、私はさまざまな人と出会うでしょう。そのとき、平等に同じ機会を与えること、公平にその人の状況に寄り添うことの両方を意識することが、みんなの安心して過ごせる社会につながるのだと思います。私は勇気を持って行動しながら、公平と平等を大切にできる人になりたいです。そして、周りの人を思いやる小さな行動を積み重ね、安心できる社会をつくる一員になりたいと考えています。

第四十四回全国中学生

人権作文コンテスト 入賞作品

◎ 法務省人権擁護局長賞

障害のある人の生きがい

宝塚市内中学校 三年 眞田 唯花

今年の春、私の家では、四つ上の姉が社会人になりました。姉には障がいがあるので、福祉就労という福祉制度を使った仕事に就きました。その仕事がどんなものが、家の中で、母と姉が話す仕事についての会話が、私の耳にも入ってきます。内容はいつも大体同じで、「みがくだけ」「たたむだけ」のような仕事を姉は毎日しているようでした。時給は、百二十円。私は、その金額を聞いてとても驚きました。それでも姉は、毎日休まず仕事に行き、家に帰ってきてからは、楽しそうに音楽を聴いて過ごしています。仕事場での様子を私は知らないけれど、毎日楽しそうにしているのは、姉にとっての楽しみ・生きがいがあるからなのかなと思います。お金や仕事内容でもない、人としての生きがいとは何なのか、私は気になり始めました。

家で姉が困っている時、私がそれを手伝うことがあります。すると、姉はよく怒りだします。例えば、ヤクルトの蓋がとれなくて困っている姉を見て、私がそれを手伝おうとすると「やめてー!」と言って、姉は怒りだします。暴言を使うくらい怒るときもありません。一方、暗いところが苦手な私は、「一階に一緒

「いついってきて」と姉によく頼むのですが、そんな時は、姉は、「仕方ないな〜」と嬉しそうにいついってきてくれます。つまり、姉は、手伝われると怒りますが、家族からのお願いや頼まれた手伝いは嬉しそうにやってくれるのです。

私たちは、家族、クラス、社会というそれぞれの集団の中で、それぞれの立場に応じた自分の役割をもっています。例えば私は、家族の中だと、食器拭きや洗濯物をたたむという役割があります。今の私は、それを喜んでいるとは言えませんが、それは、その役割をするかしないか選択できるから、そこに価値を感じにくいのだと思います。姉をはじめ、多くの重い障がいのある人は、「助けられるべき人」と位置付けられていて、だれかを手助けするという選択肢が、最初から与えられていないと思います。例えば、仮に私がAという作業ができなくて、誰かに手伝ってもらいたいと思った時、「Aの作業ができる障がいのない人」と「Aの作業ができる障がいのある人」が目の前にいたら、きっと、前者の人に声をかけると思います。私たちは、知らず知らずのうちに、障がいのある人は、私たちが「手伝ってあげる人」と位置づけ、その人ができることでもその人には頼まないようにしてしまっていると思うのです。

このようなことから、人は、自分の大切な人や関わりのある人のために何かできるということが自身自身の喜びになったり、存在価値を高めたりするのではないかと考えました。つまり、自分がなにかをして、相手が喜んだり、助けられたりすると、「生きていてよかった」「だれかに自分の存在が喜ばれた」と感じて、自分の存在を価値あるものとして実

感することができるとも思います。それが、その人の生きがいにつながるのだと思います。そう考えしてみると、私が家で姉を手伝うと、姉は怒り、逆に何かを頼むと、姉は嬉しそうにしていることに納得しました。

よく考えてみると、これは、障がいのあるないに関係ないことにも気づきました。私も家族や知り合い、友だちから頼られると、自分を必要としてくれている人たちがいると感じて嬉しくなります。今の世の中では、多くの場合、障がいのある人は、「助けられるべき人」として認識されています。しかし、そういった考えによって、障がいのある人が頼られることのない社会になってしまっているとも思いました。

障がいのある人が、助けられるべき人、頼りにくそうな人という、世の中の認識を少しでも改善し、障がいのある人が活躍できる場を見つけることが大切だと思います。

◎ 奨励賞

第四十四回全国中学生人権作文コンテスト 「兵庫県大会」入賞作品

妹が教えてくれたこと

宝塚市立宝梅中学校 三年 岡本 杏

私は障害者が身近にいます。

私の妹は生まれながらに心疾患と脳の病気があります。心臓の病気は左心低形成といい心臓の左心室が小さく三回の大きな手術とペースメーカーという心臓に植え込み心臓の動きを補助する医療機器の手術を含めると五回以上大きな手術をしています。脳の病気はダンディーウォーカー症候群という私の妹の場合は脳の欠損、脳橋全欠損、水頭症を患っていて、治すことはできません。妹が生まれた時話せるかも、歩けるかも、字が書けるかも分からないとお医者さんから言われました。私は当時5歳で障害とはどういうものか分からず、健康な妹が生まれてくると思っていました。母は私に分からないように毎日部屋で泣いていたそうです。妹が生まれて、一か月経っても妹に会うことができませんでした。毎週、大阪の大きな病院に行き、父と母だけ妹に会いに行くといい、私は別室で看護師さんと遊んでいました。そんなある日、妹に会えると両親に言われてウキウキで一番好きな服を着て病院に行きました。どんな子なんだろう、可愛いかな、抱っこしたいなと本当に楽しみでした。マスクを着けて、消毒をして、やっと

妹に会えました。そんな妹の姿はたくさん人の管に繋がれた小さな、本当に小さな赤ちゃんでした。その時、驚きと悲しみを必死に抑えたのを今でもはつきり、鮮明に覚えています。こんな子が私と一緒に遊べるかなとかしゃべれるのかなとハテナマークで頭がいっぱいになったのも覚えていています。

やっと妹が生まれてから半年後退院しましたがその後入退院を繰り返して、今、妹は九歳です。まだまだ出来ない事はたくさんありますが、私と家族には態度が人一倍大きく、私との口喧嘩の時は私が割り込めないほどしゃべります。足し算もできません。英単語も言えます。運動会の時より、家で父に追いかけられている時の方があきらかに足が速く、プーが大好きな小さな女の子になりました。私の世界一可愛い妹になりました。他の九歳の子より出来る事が少ないけれどそれでも他の九歳より勇敢で私も飲むのを拒む苦い薬を毎日飲んでる自慢の妹です。今は妹も子どもで父が養っています。妹が成人するとそう簡単にはいきません。障害者だから仕事が出来ない、仕事があっても低賃金やどうしても人の手を借りなければいけない場面がたくさんあり、大変な思いをします。そう考えると不安な気持ちがあります。ですが、今からみんなが助け合い、思いやりを持って支え合えば、妹と妹と同じように障害を持つている人たちも笑顔で生きていける世の中になると私は信じています。

そして、私がそんな誰でも笑顔で生きていける世の中をつくる一員になりたいと思っています。

そのため、私はまず身近な人を大切にしたいと思います。困っている人がいたら手を差し伸べたり、

違いを受け入れたりすることを当たり前にできる人になりたいです。妹がこれから出会う人たちもそんなふうに優しくあって欲しいと願っています。

第四十四回全国中学生人権作文コンテスト 「伊丹地区大会」入賞作品

◎ 優 秀 賞

手話がつなぐやさしい社会

宝塚市立山手台中学校 二年 福田 志織

私の母は手話を習っています。母が学生のころ、アルバイトと一緒に仕事をしていた人の中に、ろう者がいたそうです。その人とは筆談や口話でコミュニケーションをとっていたそうです。母は大人になってから、もっとたくさんコミュニケーションを取ることができていたら、もっと楽しかっただろうなと考えて、四年前から手話を習い始めました。今は、町で耳が聞こえなくて困っている人がいたときにずっと助けられるような人になれたらいいなと思っています。

七月の終わりに、清荒神にある中央図書館で、「手話で楽しむ絵本の世界」というイベントがありました。母が参加するので、今回は私と妹も参加することにしました。私は手話で自己紹介することしかできませんでしたが、参加されていたろう者の方はす

ごく喜んでくださいました。そのことがきっかけで、私も手話に興味を持ちました。

手話は、日本語や英語、中国語などと同じように、言語の一つです。手話に関する法整備も、日本の各所で進められていて、宝塚市でも二〇一六年に「手話は言語である」と明記された「宝塚市手話言語条例」が制定されました。この条例では手話への理解を促進し、使いやすい環境を整備することを目標に掲げています。支援制度を充実させるだけでなく、手話言語発表会や手話講座や養成講座も開催されていて、とてもいい取り組みだと思います。

時代とともに一歩ずつ、ろう者にとって優しい社会になりつつはありますが、真にインクルーシブな地域社会の実現を目指すには、まだまだ課題も残っています。手話は特別なスキルで、通訳に任せるものという風潮があり、実際に手話でコミュニケーションができる人は少ないのが現状です。しかしより多くの人々が、英語などと同じように、少しでも使うことができれば、「伝えたい、理解したい」という思いは届くと思います。また、情報保証の認識が足りず、テレビでの字幕や手話通訳が不十分なことも多いそうです。私たちが何かを発信するときにも、聞こえない人もいるかもしれないと想像することが大切だと思います。すべての人が自分らしく生きられる社会は誰もが「情報」「意志」「感情」を同じように共有できる社会なのだと思います。そんな社会を目指すためには、私たちの意識や行動の変化が不可欠です。

母が見ている「みんなの手話」という番組で、今年の十一月に「デフリンピック」というスポーツの

国際大会が初めて日本で開催されることを知りました。デフ (Deaf) とは、英語で「耳が聞こえない」という意味です。「デフリンピック」は聞こえない、聞こえにくい人の国際的なオリンピックなのだそうです。第二回大会は一九二四年にパリで開催され、今年の東京大会は記念すべき百周年の大会になります。そのような歴史のある国際大会ですが、「デフリンピック」に関する報道をあまり見たことはありません。パラリンピックに比べると社会的な認知度が低いのか、もしくはあまり関心がなくて見過ごされていたのだと思います。東京で開催される「デフリンピック」をきっかけに、手話やろう者の活躍がクローズアップされるのではないかと思います。

耳が聞こえなくて困っている人と出会ったときに、そっと助けられるようになりたいと思っている母のよう、私も簡単な手話で会話し、誰かの役に立ちたいなと思うようになりました。そのためにならず手話を学んでいきたいと思っています。

太陽

宝塚市立光が丘中学校 一年 小笠原 悠愛

朝がくるのが怖かった。世界が終われば良いのに、なんて本気で願っていた。誰かの一言で人を信じていることができなくなった。私はあの日、孤独な誰かを救える人が、本物の太陽だということを知った。

昔から絶えることがないじめは、いつ終わりを

迎えるのか。いじめられている側は指をくわえて黙っているしかないのだろうか。いじめの多くは発覚するのが遅かったり、発覚しないまま過ぎてしまったりする。ニュースで「自殺」という言葉を聞く度に私は胸が痛む。誰かに相談することはできなかったのか、学校側はもっと早く気づくことができなかったのかとそんな気持ちになるが、実際標的になると人を頼れなくなるだろう。私も一時期いじめの標的になったことがある。無縁だったはずのいじめに急に巻きこまれて当時十歳にもなっていなかった私は毎日途方に暮れていた。それでも明日への希望を捨てることができず、元通りになると願っていた。現実私の願いが叶わないまま月日が経っていくだけだったけれど。願ってもむだだ、ということを知って私は一人で抱え込もうとした。誰かに相談すると今までの気持ちがあふれそうで怖かった。それに、相談した時点で負けのような気もした。意地っ張りな自分が世界で一番嫌いだ。この状況を招いたのは自分のせいだと言いついて気持ちをおさえようとしたが、弱い私が強がりである、という状態が長く続くはずがなかった。途中からはボロボロだったはずだ。誰かのささいな一言で心がえぐられ、誰かのささいな一言で自分の気持ちがあふれそうになる。そんな不安定な状態になっても私は「元気な自分」を演じていた。親やクラスメイトには気づかれていたかも知れないがこれが幼かった私の精一杯だった。そんな日々が半年ほど続いた日、隣のクラスの親友が私に声をかけてくれた。

「私で良ければ話、聞くん」

と。その一言で今までの気持ちがあふれそうになっ

た。私は唯一仲良くしてくれた親友に迷惑をかけたくなくて

「大丈夫だから、放っておいて！」

と強めに当たってしまったこともあった。でも親友はめげずに声をかけてくれた。苦しかった日々も親友が側にいてくれたから生きていけた。私にとって太陽みたいな人だった。親友のおかげでいじめを乗り越えることができた私は生きる希望を見いだせた。その後の景色はこれまでのことが嘘のように輝いていた。このあと無事に標的が変わったのだが、はたしてそれは無事と言えるのだろうか。結局誰かがいじめられている状況は変わりないし、私自身が失ったものはとりかえすことができない。私が自分のことばかり考えていたときに、親友はいろんな人に寄り添ってあげていたらしい。私の憧れは親友になった。親友のおかげで私は誰かの太陽になろうと思った。それが生きる希望をくれた親友への恩返しだからだ。いじめられた経験のある私にしかできないことはきっとあるし、いじめを乗り越えた後の景色はごく一部の人だけが知っていることだろう。いじめはたいいてい主犯の人が辛く感じたことを誰かにぶつけているだけですぐに広まる。私はいじめを伝染病のようなものだと思う。ワクチンのように、誰かが助けなければこの状況は改善されない。いつ誰が始めてもおかしくない。私がたまたま被害者になっただけなのだ。それでもいじめは許されるものではないが、これ以上伝染病のようにいじめが広がることはありませんように願うばかりだった。

いじめがなくなる、なんて無理なことかもしれない。そんな話をして笑われるだけかもしれない。

ただど私たちはそんな未来を信じて、必死にもがいて生きるしかないのだ。生きていけば、夜は必ず明けると。

「私でよければ話、聞くん」

いつしか親友がかけてくれた一言が、私という存在が、誰かの太陽になれば良いな、と思いながら私は今日も、生きる。

◎ 奨励賞

一つの希望

宝塚市立山手台中学校 三年 是枝 亮介

ぼくは、普通の人よりも小さく生まれてきた。一般的に生まれてくる赤ちゃんの体重は平均3000g。しかしぼくはその約6分の1548gで生まれてきた。母からの話によると、ぼくは手のひら一つ分に乗るサイズで、死んでしまうかもしれない。だから今のぼくがいるのはとても奇跡的なことなんだよと教えてくれた。ぼくは、体が小さいことを「ネタ」にして人を驚かせたり、笑わせたり、仲間をつくらした。声変わりしていかないのも自分の有利なことにして、合唱「スクールのパートをソプラノにすると決めたことを言ったら驚かせたりもした。自分でも、こんなことは悪いことではないかと思っていた。しかし、たった数日前にそんなことを悪く思ってしまうような出来事があった。小さく生まれたために、東京の病院に健診をうけに行った。だが、実質

旅行みたいなものだったので、ぼくはとても楽しみにしていた。そして病院での健診が始まった。すると、最初の検査が始まるまで待っていた時に、見覚えのない女性が母と一緒にやってきた。後に分かったことだが、その女性は僕と同じ時期に生まれ、僕より小さく生まれてきた子のお母さんだった。そしてその子は、特別支援学級で学校生活を過ごしているという。その時に、ぼくはかと思った。「小さく生まれてきた人は、やはり発達が遅かったり、障害がついてしまう人も少なくない訳だ。だったら、何故ぼくは何もないんだ。何でぼくだけ・・・」と急に罪悪感が押しよせてきた。障害で苦しんでいる子どもたちは数えきれないほどいるのに、ぼくはその事をあまり知れていなくて、小さく生まれてきたことがとても嫌に思った。だが、それがどれだけ難しいことを理解していなかった。そんな気持ちの中、検査は順調に進んでいき、最後にぼくが生まれた時からお世話になった先生の話聞いた。すると、その先生が、「良かったら亮介君が赤ちゃんだった時と同じくらい小さな赤ちゃん見に行く？」と聞かれた。ぼくは賛成すると、早速その赤ちゃんがいる所へ向かった。そして、その赤ちゃんを見てみると、ぼくはひどく驚いた。何本もの管が繋がっていて、とても小さな体で一生懸命生きてるように見えた。先生は、「小さい子はどうしても他の人よりも発達が遅かったり、障害がついてしまうリスクが高いから、亮介君は病気にもかからず、他の人についていけるからすごいよね」と言ってくれた。その時、ぼくは分かった。たとえ直接体験してなくとも、間接的に力になれば良いと。こんなに小さく生まれたぼくでも、頑張り続けたら

ここまでやっていけるということが分ければ、ぼくと同じ境遇の人が少しでも「頑張ろう」「元氣出そう」と思えるかもしれない。一つの希望になれるかもしれない。そう思ったぼくは、もう罪悪感など一つもなかった。なので、これからも人を驚かせたり、笑わせたりすることは続けていきたい。この世界の誰かが、ぼくの事を知り、元氣になってくれることを願っている。また、ぼくをここまで育ててくれた病院の方々、そしてぼくを生んでくれた母と父に感謝したい。

不機嫌という暴力

宝塚市立中山五月中学校 三年 伊藤 碧唯

暴力といえば、自分の手や足などで相手に直接危害を与えることを想像すると思います。しかし、自分の思い通りにいかない、自分が何かしらの理由で腹を立てている、その思いを態度として表し、周りの人に気を遣わせたり、嫌な思いをさせたりすることとも一種の暴力だと私は前から思っていました。昨年、これに「フキハラ」という名前が付くことを知りました。それは、周りの人が安心して自分らしく過ごすということを侵害することです。不機嫌をただの不機嫌としてすましてはいけないのではないのでしょうか。

私の身の回りにも、少なからず不機嫌を前面に出す人がいます。私はそれを見ていて、とても嫌な気

持ちになります。その不機嫌な状態で人をさらに傷つけることがあります。きっとその不機嫌にも様々な原因があり、その不機嫌を出す人も苦しいのでしよう。でもその不機嫌を外に出すことの肯定とはなりません。私はそんな「フキハラ」がもつと世の中に認知されてほしいと思っています。

実は、それをチャットGPTに相談してみたのです。「フキハラ」の問題点を聞くと、5つの問題点がありました。1、精神的な圧力、周りの人が過剰に気を使い精神的に疲弊する。2、「コミュニケーションが崩れる、自由な意見ができなくなったり、建設的な話し合いができず、問題が放置されたりすること。3、関係性のゆがみ、対等な人間関係でなくなり、長期的には信頼が壊れる。4、本人の気づきの難しさ、自覚がないことが多い。5、周囲の自己肯定感の低下、自分が悪いからと思ひ込みやすくなり自己評価が下がりやすくなる。つまり、「目に見えない形」で人間関係や、心理的安全性を壊していくことが一番の問題点と答えてくれました。このどれにも私はとても納得し、不機嫌を出すことで周りに与える、心の傷付きの大きさを改めて感じました。

私は今、中学三年生で受験生、生徒会の仕事も楽しいことばかりじゃない、時には疑問を抱いたりやる気を失ったりすることもあります。その自分のモヤモヤを家族に出してしまっていることは否めません。もしかすると家だけでなく、外でも出てしまっているかもしれません。私の言葉で誰かが傷ついたり、嫌な思いをしていたりすることに対して無自覚である自分にチャットGPTの対話を通して、叱咤されたような気がしました。人間同士が理解しあえな

いのは当たり前で、自分の思い通りにならないのも当たり前です。それでも、不機嫌という暴力を振りかざすのはいけません。これから私は、今まで以上にたくさんの人と出会い、多くの人とかかわって生活していくことだと思っています。だからこそ、自分を中心に考えるのではなく自分の周りの人についても思いをはせることで人を大切にしていくことになると思います。私はそういう人を目指し、困ったときには周りの人やチャットGPTに相談し、いつまでも人を大切にできる人でありたいです。

ハートんじんけん作品賞
入賞作品〈標語の部〉

○最優秀

きみがいる だからわたしも かがやける

長尾台小学校3年 木村 小夏

空気よみ 周りと一緒に 笑うより

まずは自分の 心にきいて

宝塚第一小学校6年 三谷 紗雪

匿名で 書かれる重さと 書く軽さ

南ひばりガ丘中学校3年 原 蒼二郎

ゆるし合う 心に開く 愛の花

一般 草野 喜久代

○優 秀

遊びでも きずつく言葉は いやになる

宝塚第一小学校3年 谷口 加純

たすけよう こまった人を おいていかない

美座小学校3年 今崎 奏音

きみのせき いつでもここに あるからね

雲雀丘学園小学校5年 松井 航生

脈々と 未来へ続く バリアフリー

雲雀丘学園小学校6年 後中 賜音

気づいてよ 君の「普通」と 相手の「苦痛」

南ひばりガ丘中学校3年 川上 空愛

ごめんなさい 言える勇気と 許せる心

光力丘中学校2年 細尾 菜々子

その言葉 ほんとに送って大丈夫？ 送信前に ひと呼吸

一般 藤本 和子

ログインは 優しさスイッチ オンにして

一般 堀場 亮輔

○佳 作

なやみごと 何でも聞くよ だいじょうぶ？

末広小学校3年 山本 花那

ごめんなさいの まほうのことで なかなおり

安倉小学校2年 角田 莉子

「だいじょうぶ」 みんながいつだって さよならの

西山小学校3年 渡邊 結月

見えてない 見ようとしてない だけじゃない？

安倉北小学校6年 伊勢脇 研介

心のきず ぐすりをのんでも なおらない

西山小学校5年 木村 花

気づいてあげて 声に出せない 心の痛み

小浜小学校6年 加藤 杏夏

なんだか変 いつもと違うは SOS

西谷中学校2年 田中 結菜

目の前の 相手のことを 知る努力

宝塚第一中学校3年 山河 明日美

変なやつ それは 何が基準なの

宝塚中学校3年 小田 侑空

外国人？あなたも私も地球人

一般 佐々木 基文

いじめっ子 見て見ぬ振りも いじめっ子

一般 山本 桐央

多様性 知って広げる 心のとびら

一般 細見 幸子

ハーとん じんけん作品賞
入賞作品（ポスターの部）

優 秀



長尾台小学校
なかむら しおり
2年 仲村 祉菜

最 優 秀



山手台小学校
はるた なほ
3年 春田 渚帆



末広小学校
おおいつ さくら
2年 大井津 咲良



すみれが丘小学校
うちぼり にか
6年 内堀 仁香



丸橋小学校
やすなが
6年 安永 ゆい



安倉中学校
さの みゆ
3年 佐野 心悠

佳作



長尾台小学校
1年 さかもと れん たろう
坂本 蓮太郎

優秀



長尾小学校
4年 わたなべ ふう か
渡邊 風香



小浜小学校
1年 たばた あかね
田端 茜



高司中学校
2年 まの ゆま
間野 悠方



良元小学校
3年 つじ まもる
辻 真守



長尾中学校
3年 ひらた いき
平田 樹



宝塚中学校
1年 安達 理乃



逆瀬台小学校
6年 松元 葵



高司中学校
3年 北村 美音



長尾南小学校
6年 福家 瑞基



長尾中学校
3年 小林 湊美



宝塚小学校
5年 森本 陽紀

ハーとん じんけん作品賞 入賞作品（写真の部）

佳作



宝梅中学校 3年 ^{こんどう}近藤 ^{ゆら}由楽
多様性



西谷中学校 3年 ^{しおみ}塩見 ^{さつき}咲月
つなぐ

最優秀



雲雀丘学園小学校 3年 ^{むねやま}心山 ^{つむぎ}紬
四葉にひろがる幸せの色

優秀



宝梅中学校 3年 ^{さかた}坂田 ^{さわこ}佐和子
同じ空の下 誰もが笑える未来へ



御殿山中学校 2年 ^{しのざき}篠崎 ^{ゆいな}由奈
「生」を大切に想いつなげていきたい



雲雀丘学園小学校 6年 ^{うしろなか}後中 ^{しおん}賜音
三世代の笑顔

2025年度「ハーとん じんけん作品賞」 作品応募総数

- ◇ 作文の部……………125点
- ◇ 標語の部……………399点
- ◇ ポスターの部……………177点
- ◇ 写真の部……………17点

人権尊重都市宣言

すべての人びとの基本的な人権が尊重され、平和で、自由で、平等な社会で、幸せに暮らせることは人類共通の願いです。しかし、私たちの身のまわりには、今なお、さまざまな差別や人権侵害があとをたちません。人が人として互いに尊び合い、すべての人びとの人権が保障される、明るく住みよい地域社会を築き上げるために、より積極的な取り組みが求められています。人権は、市民一人ひとりの不断の努力によって守り、築かれなければなりません。水と緑とふれあい・共生のまちをめざす、私たちのまち宝塚市は、ここに思いを新たにして、本市を「人権尊重都市」とすることを宣言します。

平成8年3月5日

宝 塚 市



宝同協マスコットキャラクター
ハーとん